



赤
まん
ま

赤まんま

永井萌二著

母たちにおくる話



りろん社／ほーむらいぶらりい

永 井 萌 二 (ながいほうじ)

1920年(大正9年)5月4日、東京に生まれた。
早稲田大学文学部社会学科卒。1946年(昭和21年)1月、
朝日新聞社に入社、これまで主として週刊朝日の仕事をし
てきた。文芸朝日副編集長をへて、現在ふたたび週刊朝日
編集部員(次長待遇)。著書「ささふね船長」(昭和30年度
産経児童出版文化賞受賞)、「白鳥ねむるとき」「どろんこ
天国」など。
日本ペンクラブ会員。

赤 ま ん ま

1965年6月 第一刷

定価 420 円

著 者 永 井 萌 二

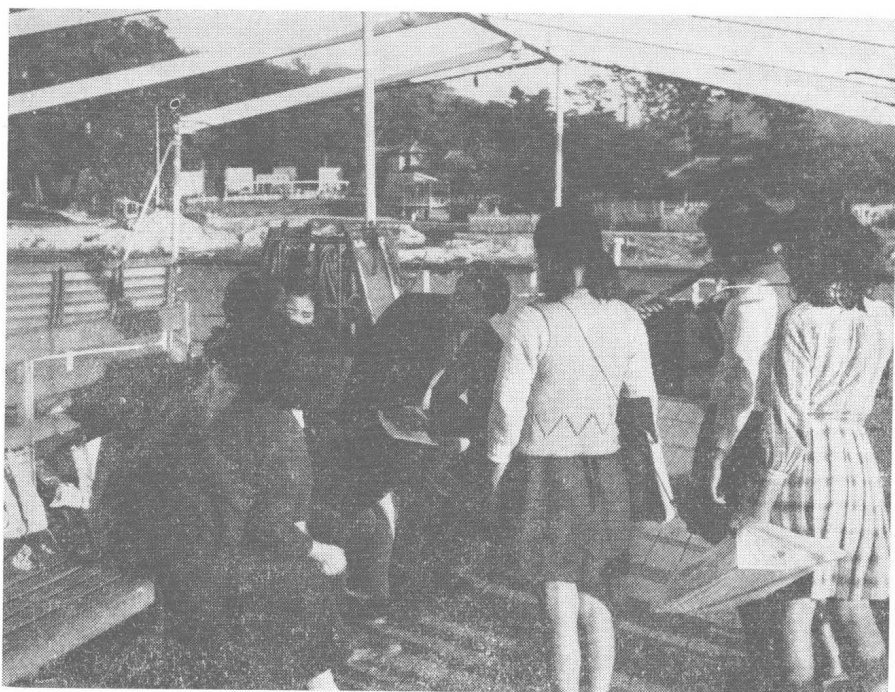
発行者 小 宮 山 量 平

発行所 株式会社 理 論 社

東京都千代田区神田神保町 1-64

振替東京95736・電話(291)5668・9

鼓和印刷・橋本製本



取 材 中 の 菊 丸 で

まえがき * 永井さんの仕事

歩いて、みつめて、書いて……それを仕事とする人。その人の歩みをふりかえてみると、ほのぼのと、よみがえってくるものがある。

あるときは、気負って、あるときは、こうふんして、そしてあるときは、涙ぐんで……その人は、なまなましい「現実」にたちむかいつづけてきた。すぎさってみれば、そのときどきの作者の心の軌跡も、作者がとらえた「現実」も、人のいとなみのあたたかさを示し、ふくらみのある歴史となっている。

新聞も、週刊誌も、人びとは、あつという間に読みすててきたことだろう。センセーショナルなものに吸いよせられて、それらを手にしながら、うちつづく衝撃にすっかり馴れきって、それらを



忘れさることに熟達^{じゆくたつ}したことだろう。しかし、そんな人びとの心にも、かえって、忘れがたく積みかさねられてきたものがある。それこそが、わたしたちの心を、不信や絶望から救い、生きることへの信頼につなげてきたのだ。

それを、「ヒューマニズム」などといったのでは、かえって、つまらない。

「あたたかさ」とでもいうよりほか、いいようもない心——そんな心が、歩いて、みつめて、書いてきたあとを、そのほんの一部を、この本は示している。

永井さんの仕事は、朝日新聞記者、それも『週刊朝日』での報道記事が、おもなものであった。日ごろ、そのあたたかい筆にひかれていたわたしは、永井さんの仕事のあとをそのまま反映するような本を、うみだしたいと願っていた。いま、その願いはかなえられたのであるが——。わたしは、この本を、あえて「ほーむ・らいぶらりい」の一冊にくわえさせていただいた。もしも家庭で、学校で、戦後日本の歴史を語るときがあるとすれば、片すみで、黙々と、歴史を積みかさねてきたものたちをこえ、忘れないでいただきたい、と思うからである。こうして集めてみれば、永井さんの、そのときどきに書いた断片には、この「忘れられてはならない」庶民のいとなみのあたたかさが、なんと、まっすぐに書きとどめられていることだろう！

〈小宮山量平〉

赤まんま／もくじ



巖流島にて



まえがき…………… 1

プロローグ

葉っぱ子ちゃん…………… 7

第1部 あのことろ

焼跡のメルヘン…………… 21

第一話 とき子のバラ…………… 22

第二話 白い花…………… 26

第三話 雀のおやど…………… 29

第四話 花売娘…………… 32

第五話 踊り子…………… 37

第六話 温泉…………… 40

第七話 大泥棒…………… 43

地下道からの十年…………… 48



豊州炭鉱の現場にて（左から四人目）

第2部 片すみからのレポート

隅田川の子どもたち……………66

有楽町を去った街頭詩人……………75

たった二人の出版社……………83

日本のチベット……………91

山びこ学校の子どもたち……………101

大人になった山びこ学校……………123

第3部 この年月

赤まんま……………140

母の作文……………186

著者の横顔 前川康男……………205



写真／日本のチベット

渡部市美先生

隅田川の子・たった二人の工場

山びこ学校

豊州炭坑

(林 忠彦)

(朝日出版写真部・杉崎弘之)

(〃 稲村不二夫)

(〃 松本栄一)

(〃 小柳春男)

さしえ／久米宏一
そうてい／福田庄助

プロログ

葉っぱ子ちゃん



宮城県青根分教場にて

山からの手紙

葉っぱ子ちゃん

おげんきですか。しばらくだね。葉っぱ子ちゃんは、
いまでも、やっぱり、おちびさんで、大きな目をくるく
るさせて、

「ねっ、おじさん、おうた、教えてあげようか」

と、かわいい声で、童謡をうたってるかしら。こない
だ、うちの涼一が、私に四国の地図をひろげてみせて

「ねっ、パパ、葉っぱ子ちゃんのうち、ここだね」

と、とがったえんぴつのさきで、高知県のはしっこに
ある海辺の町をつきました。

「ああ、ここはねえ、よく、台風が日本に、はいって
くる玄関口げんかんぐちだよ」

といったら、

「ふーん、葉っぱ子ちゃんのはかるいから、台風に吹き
とばされちゃわないかな」

と涼一が笑いだしました。でも、葉っぱ子ちゃんは、

南の国のつよい陽をあびて育って、もうおちびさんでは
ないかもしれないね。それに涼一が六年生だから、あ
なたはもう四年生だ。あれから六年……。葉っぱ子ちゃ
んなんていったら、しかられるかな。本名の「葉子はこさ
ま」と書かなければいけないのかもしれないね。

それでは、葉子さま。

いま、おじさんは、このおたよりを長野県の白馬岳の
ふもとの村でかいています。虫の声につつまれながら、
とてもふしぎな、魔法の万年筆で……。

じつは、夏のおわりから、ずーっとこの山のホテルで、
子どものための小説をかいていらっしゃる先生を、ふた
りの友人といっしょにおたずねしているのです。

その友人のひとり前川康男まえがわのやすおくんは、北海道の札幌から、
もうひとり鈴木隆たかしくんは、名古屋から、そして私は東京
からと、三人が初秋の信州のちいさな駅で、けさ、おち
あい「わっ」といきなり先生をおどろかしたんです。

で、先生というのは、ことし七十二歳になられる坪田
譲治つばた じょうじ先生のことです。

「いやあ、ゆかいですなあ。は、は、は、は」

シラカバと、カラマツの、林の道を坪田先生は先にな
って歩かれ、

「ほう、そうですか。二十五年ぶりですか。は、は、
は……」

と、ほんとうにたのしそでした。鈴木くと前川く
んと私は、同級生で仲よしで、二十五年前、大学生にな
ったばかりのときに、いっしょによく童話をかいては、
坪田先生にみてもらっていたんです。

私たちの学生時代は、勉強どころか、いつ、戦地へひ
っぱっていかれるかわらない不安につつまれていました。
でも、三人は、

「そうだ、未来を背負う日本の子どものために、なに
か、うつくしい作品を書きのこして、いこうじゃない
か」

と、おたがいに話しあったものでした。

そんなころ、信州の野尻湖のほとりにおられた坪田先
生を三人でいっしょにお訪ねして、とてもごちそうにな
り、一晚、語りあきました。その日の思い出は、いつ
までも、私たちの胸から、きえませんでした。

ところが戦後、三人とも、とても生活が忙しくて、な
かなか顔をあわせる機会はなく、

「もう一度、あんな日を持ちたいものです」

と、手紙にかいてみるだけでした。でも、いま、二十
五年ぶりに、やっと念願ねんがんをはたした喜びに、四十一歳の
私たちは、子どものようにはしゃぐのでした。

ほそい道は、坪田先生を先頭に、私たちは小学生のよ
うに一列になって歩き、アンデルセンや、『クオレ』や、
『家なき子』や、坪田先生の『風の中の子供』や、そん
な童話のことばかりはなしました。

四人いっしょに、ちいさなケープル・カーにゆられて
兎平うさぎへいというところまで、わたりながら、

「クリスマスごろは、ここは深い雪におおわれるんで
すね。先生、まるで『アルプスの少女』のハイジがくら
しているようなところですね」

「は、は、は、そうすると私はハイジのおじいさんの
アルムおじいさんですか」

と先生は白い雲の上で笑いました。

私たちは、両親をなくしたおさないハイジが、スイス

のアルプスの山のなかで、明るい少女として育ち、まわりの人たちをしあわせにしていく物語りについて、いつまでも話しあったのでした。そうして何十年も前に書かれた文学が、現代の私たちの生活のなかにも生きていることに、あらためておどろくのでした。

そのかえりのケールカーななかで、先生は笑いながら、パーカーの万年筆を私にくださいました。

「さあなまけものの永井君、これでひとつ傑作をかい下さい」

その晩、私たちはホテルでビールをのみ、なつかしい歌をうたいました。その歌のなかには、小さな葉っぱ子ちゃん、まわらぬ舌でよくうたった「赤トンボ」もはいつていましたよ。そして、二十五年の月日が流れていることにいまさらのようにおどろくのでした。

オー・ヘンリーという人の小説に、こんなすじのものがあります。なかのよいふたりの少年が、別れるとき、「おたがいどこでくらしても、十年後のきょう、ここでまた、あおうじゃないか」

と、かたく約束するのですが、さてその再会の日に、

ひとり警官になり、一人は泥棒になっていたという物語りです。でも私たちは、とても元気で一生けんめい働き、そして日本のアルプスで、こうして先生をかこむしあわせを、しみじみとかみしめたのでした。

「おい、加藤がいたらなあ」

とつぜん鈴木くんがポツリといいました。

加藤くん……、それはむかしこの三人の童話をよく読んで批評してくれた同級生の加藤文造くんでした。

葉っぱ子ちゃん、

それで私があなたに手紙をかいいたわけがわかったでしょう。加藤くんこそあなたのおとうさんなんですから――

戦後、四国の海べのふるさとで中学校の先生をしていたあなたのおとうさんの加藤文造くんが転勤で東京にいられたとき、葉っぱ子ちゃんはまだ二つのかわいい赤ちゃんでした。ちょうど私の家のおとなりの家が空いていたので、そこへ葉っぱ子ちゃんと、ご両親は引越してきてしたのでした。

それから二年間、このおとなり同士、それは仲よくく

らしましたね。葉っぱ子ちゃんと私の一人息子の涼一はとても仲よしで、庭の木かげでよくママゴトもしていましたね。庭づたいに

「兄ちゃん」

とあそびにきた、葉っぱ子ちゃんのちいさな影ぼうしまで私はおぼえているのです。

でも、あなたが四つの時、あなたのおうちに大きな不幸がおしよせました。ここに書くのにしのびないのですが、あなたのおかあさんは、ふとしたかぜがもとでなくなりしました。そうして、ちいさな葉っぱ子ちゃんをかかえて、つとめと家事でつかれきったおとうさんも、それから半年後に狭心症で急死しました。

「葉っぱ子をよろしく」

かけつけた私の妻に、あなたのおとうさんはたった一言、かすかにいいのこされたそうです。

それからあなたは、四国のおばあさんのところへ引きとられていったのです。

よく、涼一とはなすのですが、おかあさんが亡くなられたころ、葉っぱ子ちゃんは、私の家のテレビの前で、

涼一のおとなりでおとなしくすわっていました。いつかあるドラマに出てくる女の人の顔をみて

「かあさん」

と、いつてしくしく泣きだしたことがありました。その女優さんの顔は、ほんとうに亡くなられた葉っぱ子ちゃんのおかあさんにそっくりだったのです。

たしかそのドラマは火曜日の夜だけだったのですが、毎週一度テレビのおかあさんにしがみつく葉っぱ子ちゃんを、涼一がいじらしく思ったのでしょうか。まもなく「テレビのかあさん」と同じ顔を町のクスリやさんのカバンにあるのをみつけてきました。そして葉っぱ子ちゃんに、

「兄ちゃんがいいものみせてあげるね」

と、あなたの手をひいて町までいったことがありましたっけ。

私はいま、白馬岳のホテルの一室で、坪田先生にいただいた万年筆をにぎって、ちいさな机にむかっていますと、おさなかつた葉っぱ子ちゃんの顔が電気スタンドのまわりにちらちらします。

「葉っぱ子をよろしく」

と、さいごにいい残されたおとうさんの約束を私は、
はずかしいことながら何もはたしておりません。もう四
年生のあなたなら、いくらか「人生」がわかるでしょう。

私はこれまでろくな作品もない童話作家なのですが、
せめて先生にいただいた万年筆で、これからちよくちよ
く海辺のハイジにおたよりかくことにきめました。

ほんとうに手品のようにすらすらと書ける万年筆なの
ですが、きょうはこのへんでおわかれしました。

鈴木くんも前川くんもぐっすり寝てしまいました。

きっと二十五年前の学生時代の夢をみているかもしれ
ませんね。

では、さようなら。

東京からの手紙

葉っぱ子ちゃん

山からだしたおじさんの手紙に、さっそくすてきなご
返事をくださってありがとう。

（あたしは、もう、葉っぱ子ではありません。背も高い
し、海を二〇〇メートルもおよげるカップ子ですよ。）

ピチピチしたあなたのお手紙のおかげで、おじさんは、
きょう、すっかりたのしくなっていました。

（おじさん、レスって、かしこい犬でしたね。いつか、
あたしが善福寺の池におちておぼれかかったとき、レス
と涼ちゃんにたすけてもらったことがあります。）

そうです。そのレスは、ふさふさした毛なみの、セッ
ター種のかしこい犬でしたが、あの頃、もう、おじいさ
んだったのです。かわいそうに、きょう年の夏、亡くなり
ました。私の家のすみっこに、レスのお墓があります。

『家なき子』のカピのように、それはやさしい目をした
レスは、まだちいさかった葉っぱ子ちゃんと涼一のおも
りやくで、どこにでもついていったものでした。六つの
涼一と四つの葉っぱ子は、兄妹のように仲よしで、よく、
ちかくの善福寺池に木ぎれのボートをうかべてちいさな
木の実や花をのせて、あそんだものです。

ある日、涼一が、レスをつれて池のうらの林で、ボー
トにのせる木の実をひろっているあいだに、葉っぱ子ち

ゃんは足をふみはずし、あつという間に、池に落ちて、そのまま、ずぶずぶと足をすいとられてしまいました。

「あつ、あーん」

あなたの泣き声を、まっさきにききつけたのがレスでした。きゃんきゃんと、きちがいのようにほえながら、いきなり水にとびこむと、葉子さんのセーターをくわえました。ちょうど、池のまわりを散歩していた大人が駆けつけてくれましたので、ぶじにすくいあげられたのですが、ほんとにあぶないところでしたよ。

さて葉っぱ子ちゃんのおかげで、私もわすれていたたいせつなことを思い出したというわけですが、やっぱり涼一も、私とおなじきもちだったのでしょうか。

「うん、あるとき葉っぱ子ちゃん、ずぶぬれでさ。ぼく、びっくりしちゃったよ。でも、いまのカップ子ちゃんなら、池におちても、おぼれっこないね」

といって笑いました。

封筒のなかからポロッとおちてきた、オカッパの健康そうなあなたのおしゃしんをみて、

「えっ、これが、葉っぱ子ちゃん？」

私の妻も目をまるくして、おどろき、六年前、むかえにきたおばあさんに手をひかれた葉っぱ子ちゃんが、私の家の前の道をふりかえりふりかえり、さよならをしていったさびしそうな、うしろすがたが、

「いつまでもわすれられせんわ」
としんみりしていました。

でも、その葉っぱ子ちゃんが、いまでは、明るいカップ子になって、高知県のおばあさんの家で、おおぜいのいとこさんたちと、にぎやかにくらしていらっしゃるのをしって、なんともうれしく思います。

いま、ビュービュー、つめたい風が、窓をたたく、この東京の郊外の家で、一通のおたよりをなかに、私たちおや子は、いつまでも、遠い南の海べのハイジの生活を心にかがいていたのでした。それから、私は六年生の涼一とこんなことを話しました。

「ほら、地図の上でみると、高知県なんてこんなにおいところだろ。でも、カップ子ちゃんと同じ思い出を持つてる君が、この手紙をよんでとまるでとなり町にすんでるみたいになく、心がかようだろう」

ところで、わたしは、地図をみるのが大好きなんです。もう十何年も、ニュースを追いかけてくらししてきたのですが、いつも地方へ取材に出かけるまえは、カメラマンと地図をひろげて、これからたずねていく地名をさがしだしながら、

「うへ、この村から先は、バスもなさそうだよ」

「道なき道を、六キロも行軍か」

などと、遠足にいく小学生のようにはしゃいでしまいます。

でも、細いえんぴつのさきで指す、そのちいさな町や村にも、さまざまな人間の喜びやかなしみがあります。そんな期待に、胸をふくらませながら、わたしはこれまで、ずいぶん歩きまわったものでした。

だから取材で知りあった忘れることのできない人が、全国のいろんな町や村にたくさんいます。この九千五百万の人間がくらしている細長い日本の地図をひらいて、じつとながめていると、その上に、私はさまざまなゆめをえがくことができます。

「あの三年前の伊勢湾台風で、家が押しながされて、

たった一人生きのこって、とほうにくれていた、あの中学生の吉田君は三学期の英語の試験に、いい点とったかな」

とか、

「あの岩手県の分教場の田中先生は、さびしい山のなかで、いまごろは正月をむかえる子どもたちにトランプでもおしえているのかしら」

とか、離れていると、思い出を土台にして、その上に、うつくしい空想がどんどん育ってゆくのですね。

こういう人たちは、ときたまおたよりも交わしているんです。ところで、私がいま、いちばん、気になるのは、北海道の深い雪の開拓地で三度めの冬をむかえた小学校一年生のトン坊くんのことなんです。それを葉っぱ子ちゃんに話してあげましょうか。

トン坊くんは江藤博文さんという開拓者の子ともです。江藤さんという人は、ながい間、九州の筑豊の炭鉱で、モグラのように、石炭を掘りつづけてきた人ですが、むかしはよかった石炭をほる仕事も、さっぱりだめになったのです。働いても、ちんぎんももらえない江藤さんは